

保育の本から

『保育環境論』を讀んで

石井 叔子



今日の日本の幼児教育は、幼児の主体性を大切に、遊びを通して指導する保育即ち「環境を通して行う教育」といわれて十年目、それぞれの幼稚園で試行錯誤しながら保育をしている。が最近子どもたちの様子が変わり、主体性はなくなり、自分本位になった、これは、幼児教育が間違っているのではないかといわれはじめた。幼児のやりたいという気持ちを大切にしよう、できるだけ禁止や制約をしないようにしてすきな遊びを自分で見つけて遊ぶ保育では、我慢をすることや、一定時間静かに授業をうける、自分で考えることなどが育たないといわれる。自由が放任になっている、保育者の指導が足りない、保育を変

えなければならぬのだろうか」と保育の場は混迷している。

幼児の身になつて考えよう

「環境を通して行う教育」を正しく理解することは非常に難しい。保育の場で起こるさまざまな問題は、保育者と幼児とのかわりの中での行為や心情といった抽象的な問題としてとりあげられることが多く、保育者は必要以上に悩んだり、自信をなくしたりする。

本書『保育環境論』（原口純子著・フレーベル館）は、この難しい「環境を通して行う教育」について、文字どおり環境、特に幼児が直接接触れる具体的な「もの」に焦点をあてて説明している。長い間、保育室や教材など、「幼児のためにそこに在る」のが当たり前で、「そこに在る意味や役割」については考えることなく通り過ぎてきた。「これでは栄養が悪くて成長できない」と訴えている幼児たちに気付いた著者が、長年実際に幼児と共に過ごした経験から、幼児の身になつて一つ一つ分析をしている。保育の中で「もの」に助けられることはたくさんある。入園当初の不安な気持ちを、金魚によつて支えられたりする。

保育の環境について、大きく分けて、第一に保育室、教材、園舎等「もの」を通して、次に、幼児理解、援助、保育の形態、保育者論等、理論的な側面、さらに園・経営等幼稚園の現状とその問題といった三つの視点から、具体的に論じられている。もつれた毛糸の玉がするすると解けていくように環境を通して行う教育の全体像が少し見えてくる。今、

大きな問題に直面している幼児教育の新しい方向も開けてくるのではないだろうか。

保育室をみなおす

昭和三十年代前半、大部分の家庭では、まだ幼児のためにクレヨンや、画用紙などを十分に与えるまでにはいかず、幼稚園でのいろいろな教材やおもちゃ、なかでも個人用の教材は幼児にとつてとても嬉しいものだった。平成元年に、教育要領がかわったが、お庭の遊具も室内もおもちゃも教材も、子どもたちのロッカーの中身も見直されることもなく殆ど変わっていない。クレヨン、はさみ、自由画帳、粘土、のり等に油性ペンが増えた位で、相変わらずの個人用教材が入っている。幼児が自分の好きな遊びをするようになったので、ほとんど使わないまま持ち帰る幼児もいる。

保育室は、その園その保育者の保育観の表現であるともいわれる。机や椅子は勿論、そこにある紙一枚にいたるまで、大人が総掛かりでエネルギーをかけて見直さなければならぬ。今、目の前にいる幼児たちが、心から「やりたい」「やろう」という気持ちにならなければ、またそれらのものを通して何を体験するのか、経験してもらいたいかを考えて用意されていなければ、どんなに沢山の教材があっても、立派なおもちゃがあっても、それは「乏しい環境だ」と著者は指摘する。



立ち止まって考える―研究の芽

教材を整える、おもちゃを準備するとき、幼児がやりたくなるようなもの、やりたいというものを準備することは自明であるが、更に「それはなぜだろう、どうしてだろう」という意識を保育者をもつことである。それは著者自身が長年持ち続け、磨き続けた姿勢であり、研究の出発点となっている。

例えば『色紙考』 幼稚園と折り紙の関係は、様々な論議があるのに、いままで「保育者にとって役に立つ技術としての折り紙」の視点でしか殆ど取り上げられていない。では幼児にとってはどうなのか、本書は様々な角度から幼児の生活と折り紙についての論を展開している。教材は保育者の好みで取り上げたり切り捨てるのではなく、やはり「なぜ、どうして」と幼児をよく見て扱うことによって、適切な教材にもなる。色紙を、折ることと同時に、切ることにしても考察されていてこれも興味深い。当たり前遊びと考えるもせず見過ごしてきたことを反省させられる。色紙と砂について、遊びとしての比較はよくあるが、値段の比較は初めてだ。教材について保育者をもっと深く考えるようにという指摘であろう。更に『粘土・糊』については科学的分析を行い、保育の場に多くのことを提示している。決して研究のための研究ではない。保育の実践と研究はそのあり方が難しい。日常の保育の質を高めるものでなければならぬ。保育の中ではいろいろなことに

会い、気づくけれどもそれから先へまとめることがなかなかできない。幼児と過ごしながらいつも、保育者自身が問題意識—なぜ、どうして—をもって自主的に行動することが研究の第一歩だとしている。当たり前のことなのになかなか出来ない、しかしぜひ実行したいと思う。

幼児を理解することから

著者の主張は一貫して「幼児理解」に基づいている。「どんなに貧弱な環境でも文句も言わずに逞しく育っていくけなげで、いとらしい子たちのために、大人がエネルギーをかけて環境を整える」わけだが、保育環境を整えることも、教材を準備することも、すべて幼児理解から出発し、幼児理解こそ重要な保育技術であるとしている。幼児のために幼児の身になることである。幼児の目の高さになって見る、とよく言われる。たしかに見えるものが違ってくる。しかし、著者はもっと深く幼児の心、幼児の身になっている。とかく幼児理解とか援助など、言葉だけが一人歩きをしている。難しくよく分からない。こうした現状を踏まえ、やさしく丁寧に教えてくれる。著者は言う、「めざすものは、幼児のみでなく、深い人間理解である」と。それは「人が一生研ぎ続けるものだ」という。



保育って何だろう

こんなに多くのことが求められる保育とは大変な事だと思った。もう一度「保育とは何か」というところに行き着いた。本書は、保育環境論を説いているのだが、それは「人としてどう生きるか」を問いかけており、それが「保育」だと思ふ。この「説明のつかない、証明もされがたい、科学の網の目にはひっかからないモヤモヤした、一見無意味そうな動きや、先生と子どもとのつながりの中にあるもの」にどうかかわったらよいのだろうか。しかし著者は「目のまえの子どもの事実を目を注ぎ、疑問や反省をしながら幼児の心に心をよせること」「ごく普通の人間の生活感覚を大切に、生きている子どもを人として育てることである」としている。

幼児の身になつて過ごす

保育の場を離れ、今は間接的に保育や幼児に触れながら保育者をめざす学生とともに過ごしているが、それもまた多くの問題を抱えている。証明され難い「保育」の根本を常に問い返しながら、幼児のためにというよりも、幼児の身になつて心を動かしながら過ごさうと思ふ。道が見えなくなったとき、困ったとき、またうれしいとき、この本を開くと、エネルギーであなたたかくて厳しい著者の思いに出会えることと、ほっとした思いで読み終えた。

(洗足学園短期大学)